

のである。すなわち、同一性は、それが思考として理解されようと、社会的現実として理解されようと、抽象性、無反省性、自己を批判的に問わぬ存在であるとされ、固定化され、生命のない「体系」である。かかるアドルノの同一性の解釈によると、プラトンの思想も、ヘーゲルのそれも、「弁証法的」と見做されることはできない。「本来的な」弁証法は、「非同一性の一貫した意識」であり、同一性の「魔力」から自己を解放することを客観的な目標とする。それ故、哲学はただ、批判的な「否定的弁証法」としてのみ意味を有する。これに対して著者は、アドルノの批判は、例えばプロティノスやクザーヌス、カントやヘーゲルの思想構造の「責任ある解釈」には当らず、それはむしろ、形而上学の伝統の歴史的に硬化された墮落形式に対してのみ妥当すると反論する。

以上のごとく、著者は、古代から現代の最先端までを包括する視野で、伝統の再解釈とその擁護を通じて、プラトン主義者としての立場を貫く。そこでは、徹底した文献学的研究と深い哲学的洞察、および明晰な論述の、稀有の調和的結合が実現されている。著者の、概念的思考の可能性と限界を十分に自覚した反省的意識は、伝統に立ち向かう研究者の現代的なあり方として、われわれにとって一つの確実な指針となるであろう。

---

## 古田 暁訳『アンセルムス全集』

聖文舎 1980. 1029頁

印具 徹

### (1)

アンセルムス研究を生涯かけての大切な仕事の一つとしている私は、主なアンセルムスの著作を、出来るだけ多く翻訳もしなければならぬとかねがね考えていたが、多忙のため、なかなか翻訳に没頭することが出来ず、最近では些か焦りを感じ始めていた。そうしたとき、古田氏によって、アンセルムスの論文のすべてが、この

たび一気に翻訳され、『アンセルムス全集』として、1980年6月10日の日付で、聖文舎から出版されたのである。私は、驚くと共に、ほっとした深い安堵を覚えた。そして、これからは、私の立場で、焦ることなく、アンセルムス研究を、私なりに一層広く、また、一層深く、しかも、ある意味で一層容易に続けることが出来るという喜びが私の心に浮び上った。と同時に、私は、この喜びが決して私一人の喜びでなく、真理を愛する多くの人々の喜びでもあるということ、心から思った次第である。恐らく、今後、アンセルムス研究が、多くの人々によって、ことに、若い多くの学徒たちによって展開されるであろうことは、最早決して疑うことが出来ないのである。誠に喜ばしいことである。

ところで、訳者古田氏は、慶応義塾大学経済学部予科を卒業されたのち、欧米諸大学で——ことに、ローマのアンセルムス大学 (Collegio S. Anselmo) においてバガジイニ教授 (Prof. Cipriano Vagaggini) の下で——深く研鑽を積まれると共に、S. Anselmi Opera Omnia の編者シュミット神父とも交わられたところの、かつて自らベネディクト修道士でもあった非常に優秀な中世思想の研究者である。従って、古田氏の何よりの強みは、氏が中世ラテン語に熟達しておられることであると言えよう。そのことは、氏が、「あとがき」で、「アンセルムスの書いたラテン語の文体は、13世紀のトマス・アクィナスのそのように、学術的明晰さに秀でているが無味乾燥だという類のものではない。12世紀のルネサンスの先駆者だけあって、彼はその用語、文章にことのほか意識的で、その文体は些かこり過ぎている場合も多いとさえ言えよう」(1028頁) と自信をもって書いておられることによっても、容易に理解されるのである。また古田氏は、ベネディクト修道士であったアンセルムスの研究者としても、今後大いに期待できる人材であると考えられる。何故なら、そのことは、私自身も親しく交わったベネディクト修道士バガジイニ教授から古田氏が深く学ばれたということによって、十分に推察され得るからであり、さらに、私の古い記憶によれば、私が、20数年間、本当に親しく交わったシュミット神父 (Pater Schmitt) も、古田氏を日本におけるアンセルムス研究者の一人と見なしていたからである。

古田氏は、今まで述べたことでも解るように、語学的にも、思想的にも、アンセルムスによって書かれた論文の翻訳者として、誠に最適の人物であると言える。私

は、古田氏によって訳された論文のすべてを、まだ十分に読んでいないが、その訳文が優れたものであることは言うまでもないと思う。ことに、アンセルムスの対話篇は、私たちが抵抗なく読めるように、よく訳されている。例えば、『神はなぜ人間となられたか』においても、弟子のボソーが先生のアンセルムスに対して話しかけるときは、長沢信壽氏の訳文の場合と異なって、常に「先生」という誠に親しみ深い言葉が用いられている。これなどは、読者に、ごく自然なよい感じを与えるように私には思える。

とにかく私は、古田氏の訳文に、全体的に極めてよい感じを強くもっている。従って、この古田氏が、1959年に、ル・ベックで開かれた「国際アンセルムス会議」(Internationaler Anselmischer Kongreß) に出席されておられたなら、この会議で「アンセルムスにおける自由意志について」という題で話すことを許されていた私は、氏と早くから交わることが出来たわけで、私にとってどんなに有益であったかと、しみじみ考えられ大変残念に思う次第である。因みに、この会議で私は終始シュミット神父と行動を共にしていたことを、また、バガジイニイ教授がこの会議でスコラ哲学の父としてのアンセルムスについて話されたことを書き記しておく。

## (2)

ところで、このたびの古田氏による翻訳は、シュミット神父が全生涯をかけて編纂した全集——*S. Anselmi Cantuariensis Archiepiscopi Opera Omnia*——における「聖アンセルムスの神学・哲学作品の全邦訳」である。勿論、これまでも、長沢信壽氏の努力による三つの論文の優れた訳や私の些かの努力による二つの論文の拙訳や、また、最近私が訳した『瞑想録』などもあるが、アンセルムスの全論文の翻訳が一冊の本にまとめられて出版されたことは、全く驚嘆すべき壮挙であったと言える。聖文舎の出版業者としての使命感にも深い敬意を覚えざるを得ない。しかし、アンセルムスの著作には、シュミット神父の *Opera Omnia*——古田氏自身も翻訳に当ってこれを底本としておられるのである。その『全集』——によっても明らかである如く、単に論文のみではなく、古田氏も自らの訳書における「凡例」で一言ふれられているが、神学的・哲学的論文の外に非常に大切な瞑想や祈禱や書

簡があることを忘れてはならない。ある意味では、アンセルムスが如何に深く神と交わっていたかを知るために、彼の『瞑想録』や『祈禱書』が、彼の学的論文よりも大切であると言えるし、また、アンセルムスが如何に深い愛をもった真実な人格者であったかを知るために、彼の『書簡集』が、彼の学的論文よりも大切であると考えられるのである。従って、私は、このたびの学的論文の翻訳に続いて、アンセルムスの著作の翻訳者として最適な古田氏に、アンセルムスの瞑想や祈禱や書簡を全部訳して頂きたいと心から願う次第である。

そこで、『アンセルムス全集』という書名は、上に述べたアンセルムスの瞑想や祈禱や書簡のすべてが訳されたときに、始めてアンセルムスの翻訳書につけられる名である様に私には思えるのである。このことは最初から気になっていたことで、私には、このたびの優れた訳書に対して、『アンセルムス全集 I』という名を与えるか、或いは、『アンセルムス（全）論文集』という名を与えるかの、何れかにしなければならない様に考えられる。

次に、古田氏の翻訳であるが、既に述べた如く、大変わかり易いし、ことに、対話篇などの訳文はごく自然である様にさえ思えるのであって、アンセルムス思想の中心概念を示す言葉に対する訳語も極めて適切である。たとえば、ペラギウス論争におけるアウグスティヌスの思想を正しく継承し発展することによって「第二のアウグスティヌス」(Alter Augustinus) の名を与えられたアンセルムスの思想の中心概念の一つを示す言葉、——それは、実に、アンセルムス独特の言葉であるが、——*impotentiam habere* を、古田氏はごく自然に「無力を持つ」(古田訳『アンセルムス全集』506頁) と訳しておられるが、誠に適切な訳語であると思う。因みに長沢氏も同様の訳語を用いておられることを述べておきたい。また、アンセルムスにおける意志論を解明するに当たって重大な意味をもっているところの、*De libertate arbitrii* の *Capitulum 1* に見られる、(Quod) *potestas peccandi* (non *pertineat ad libertatem arbitrii.*) の訳語として「罪を犯す力」という言葉を用いておられる古田氏に、私は非常な好感を覚える。長沢氏は、しばしば、これを「罪を犯す可能性」と訳したいと言っておられたが——そして、私も、時には「可能性」としたこともあったが——、私はやはり「罪を犯す力」と訳すべきだと考えている。さらに、古田氏は、アンセルムスの恩寵論を示す言葉であるところの、*gra-*

tia praeveniens や gratia subsequens に、既に私自身が *De concordia* の第三章を訳したときに用いた訳語、即ち、「先行的恩寵」及び「後統的恩寵」を当てられるが、私も心から同意したいと思う。しかし、アンセルムスがしばしば用いている *rectitudo* に対する古田氏の訳語である「正直」(せいちよく)は、他の大切な言葉に対する古田氏の訳語が非常に素直で解り易いのと比べて、何となく不自然であるように私には考えられる。勿論、訳者が自らの見識に基づいて、原著者の言葉を訳すに当って、如何なる訳語を原語に与えようとも、それは訳者の自由であると思うが、必ずしも *rectitudo* を「正直」(せいちよく)と訳さねばならない必然性は別になく思える。むしろ、素直に、長沢氏が訳しておられる如く、「正しき」という訳語を与えた方が、少なくとも解り易いし、また、非常に自然であるように私には考えられる。元来、すべての言葉は、その背後に、歴史的な思想を担っているので、一つの外国「語」に、既に立派に自国「語」として定着しているところの、自国民にとって親しみのある言葉を決定的な訳語として与えることには可也の問題があると言える。そこで、一つの外国「語」を訳すに当って、自国「語」としては必ずしも未だ定着していない新語を、訳者がしばしば勝手に作りだして自由に用いることがある。例えば、故吉満義彦教授は、外国の書物を日本語に翻訳されるに当って、教授自身が独創的に新しくつくられた訳語を随所に用いられたと一般によく言われている。だが、そのために、吉満教授の翻訳書は、読者からよく理解されない場合が多くあったのである。従って、訳語は、出来る限り、勿論、幾分問題はあるにしても、一般に親しみのある素直で自然な言葉でなければならぬと思う。だからこそ、*rectitudo* の訳語には、「正しき」が最も相応しいのではないだろうか。

### (3)

既に述べた如く、訳語は、出来るだけ素直で自然であるべきだと思う。しかし、一つの外国語を思想的にも正確に自国語に訳すということは、やはり非常に困難である。例えば、*meritum* を古田氏は「功德」と訳しておられるが、——実は私も、トマスの『神学大全』における *De merito* を翻訳するとき、*meritum* を註において説明した上で「功德」と訳したのだが、——「功德」という言葉はもともと深い

仏教思想を背負っているのである。そして、確かに「功德」は、日本語として立派に定着している故に、meritum の訳語にこの言葉を当てはめることは誠に自然であると一応言えるにしても、meritum を「功德」と訳して、思想的に全く問題がないとは必ずしも言えないであろう。兎に角、外国語を本国語に、あらゆる意味で完全に正しく訳すということは非常に困難である。

ところで、古田氏は、「引用文献略語一覧」（同氏訳『アンセルムス全集』839頁—850頁）の中に、聖アンセルムスの作品や聖アウグスティヌスやその他の原典の外に、非常に多くのアンセルムス研究書を羅列しておられるが、私は、それらを見つめながらローマの Collegio S. Anselmo における図書館でかつて見た無数のアンセルムス研究書のことを思い出した。実際、アンセルムスに関する研究書は、アンセルムス大学に全く驚くほど多くある。古田氏は、恐らくその図書館で、多くの研究書を読まれたことであろう。そして、その読まれた本の一部を、ここに掲げられたに違いない。全く敬服する次第である。ことに、古田氏が、自ら羅列されたそれらの本の中に、Karl Barth, *Anselm: Fides Quaerens Intellectum*. tr. I. W. Robertson (New York, 1962) をあげておられるのを見て、エキュメニカル運動の立場から、私は大変うれしく思った。しかし、ハッセ (Fridericus Rudolphus Hasse) の著書が見いだされなかったことは、非常に淋しい。何故なら、私が学位論文を書いたとき用いたハッセの *Doctrina Anselmi Cantuariensis de Imagine Divina* を私の著書の中で見いだしたシュミット神父は、「ハッセの論文はすばらしい」と大変賞め称えていたからである。

兎に角、古田氏の翻訳である『アンセルムス全集』を前にして、私は非常な喜びを覚えると共に、未来に大きな希望をもつことが出来るように思う。古田氏は、誰にも容易に出来ない仕事を、一人で立派に成し遂げられたのである。私は、古田氏に、心から敬意を覚える。しかし、学問の道は、果てしなく厳しいものである。古田氏によって完成された翻訳が出た以上、最早、アンセルムスの論文に関する訳は、今後、誰によっても出される必要がないとは決して言えないと思う。そのことは、古田氏自身によっても、謙遜に、「本書はあくまでも今後のアンセルムス研究および翻訳のための踏み石でしかない」（同氏訳『アンセルムス全集』1028頁）と書かれているので、極めて明白である。従って、アンセルムスの論文は、この後、

古田氏自身によっても、また、他のアンセルムス研究者によっても、繰り返し訳されねばならないのである。実に、よりよき訳は、より深き研究者によって、始めて出されるのである。しかも翻訳は、単に「キュンストリッヒ」な問題ではなく、ある意味でもっと「ゼーリッシュ」な問題であるとも言えるのではないだろうか。そのことに関して私には忘れ得ぬ思い出がある。それは、私がかって「シュミット神父」——私は常に Pater Schmitt と呼んでいたもので、今もこのように言うのが一番自然なのである。その「シュミット神父」——に、アンセルムスの主著は *De concordia* であると思うので、早く *De concordia* をドイツ語に訳してほしいと願ったとき、「まだそれを訳すまでに私の心が深まっていない」と彼が言ったことである。翻訳は、それほどまでに深い、非常に「ゼーリッシュ」な問題だと私には思えるのである。1000ページを越える古田氏の立派な大著を前にして、私は、無限に語りたいような気持ちがする。世の多くの研究者が、この優れた大著を、十分に活用されるように心から私はおすすめしたい。そして、今後、アンセルムスに関する優れた研究書が多く出ることを、また、エキュメニカル運動がいよいよ推進されることを、心から私は期待している。